

## 罪人を招く主

エゼキエル書 18:30~32

マルコによる福音書 2:13~17

今もコロナ禍が続いており、この教会でも愛餐会などは控えられています。「食べる」ということは「生きる」ということと深く結びついています。死んでいるものは食べるということはありません。生きている者だけが食べるのです。「我らの日用の糧を、今日も与えたまえ。」主の祈りは、十戒もそうですが、前半は神について、後半は人についての項目です。後半の人についての祈願の最初が「日用の糧」についてとなっているのは大事なことです。この糧というのは、パンなど食物ですが、霊的なパンであるみ言葉をも意味することは知っております。しかし本来的にはやはりここでは、生存に必要な食物のことであり、霊的なパンも含めて人が「生きる」に必要な物全体を言っています。そこでまたこの糧については「我々の」糧を「我々に」与えてください、というものです。もちろんここで「我々」というのは信仰共同体であります。私が一人で食べることができ、一人で生きられるようにというのではなく、共に必要なものが与えられて共に生きようということです。今日では日本は飽食の時代と言われるように、多くの人に食べ物が十分すぎるくらいにいきわたっていますが、箴言にあるように「だれでも一片のパンのために罪を犯しうる。」(28:21) のです。ですから一緒に食べるというのは、共に生きるということの確認でもあるのです。

何人かが集って行く愛餐会などでは、やはり給仕する者が必要です。先ほど礼拝の中で執事任職式があり新しく一人の執事が立てられましたが、この執事という言葉は奉仕などの意味がありますが、先日のペトロのやもめがイエス様をもてなしたところや、使徒言行録で「神の言葉をないがしろにして、食事の世話をするのは良くない」としてステファノ達7人が選ばれたことなど、聖書では食事の世話をする給仕というように本来的にも使われており、それが拡張されて、今日の長老教会では信徒たちの世話や会計処理などさまざまな実務を担う役割を意味するものとなっています。

徴税人アルファイの子レビはイエス様に声をかけられて従うようになり、自宅に招きました。徴税人というのは金銭的には結構豊かであったようですので、イエス様たちを自分の家に招いて食事を出したときにも給仕がいたのかもしれませんが、ここでレビという人ですが、ある写本にはヤコブとなっています。後の方で十二人の弟子たちの名前が出て来ますが、そこではアルファイの子ヤコブとなっているのでそこに合わせたのかもしれませんが、マタイにもこの記事が知れされていますが、そこではマタイ自身となっています。いずれにしてもここでは、一人の徴税人がイエス様に選ばれて、弟子の一人になったということです。徴税人というのは先にも言いましたが、経済的には潤っていたのですが、仕事上、同胞からは嫌われていたのです。同胞からお金を巻き上げてはその上澄みを着服している、異邦人やヘロデの手先であると思われていたのです。いくら金銭に恵まれていても、友人などの親しい交わりがない人生というのは実に淋しいものではないでしょうか。そのような人から嫌われ、また愛の交わりに飢えていたレビに、当時民から人気があったイエス様がわざわざ声をかけてくださったのです。レビは何と嬉しかったことでしょうか。

レビの家にはイエス様の弟子たちの他、多くの罪人や徴税人も招かれていました。それがイエス様のご意志であるのか、あるいはレビの関係者であったかはわかりません。社会において、交わりを持つ或いはともに会食をするなどで人を選ぶ場合は、政治家たちのパーティもそうですが、社会的地位が高い人、裕福な人、能力がある人などが的となりやすいものです。それは交わりを持つことにより、自分に益となるためであり、人脈を作ったり、社会的ステイタスを上げるためでもあります。逆に社会からさげすまれている人、嫌われている人、貧しい人などはなかなか声をかけてもらえません。イエス様と同席していたのは後者のような人たちでありました。レビの家には招かれた罪人というのは、実際に律法をきちんと守らないようなあるいは守ることができないような人たちであったことでしょう。ところがファリサイ派というのは律法遵守のグループであります。モーセの律法のみならず、昔の言い伝えもきちんと守る人たちです。その中でもそばにいて弟子たちに問い詰めたのは律法学者

ですから、なおさら律法には厳しい人でした。それが律法のゆるい人たちの集まりをみて我慢できるわけがありません。その上イエス様は、後にも出て来ますが、安息日に業を行うような律法に対しては自由な人であったのです。会食の場が問題となったのは、ユダヤにはこれは食べてはいけない、これは良い、またこのようにして処理して食べるなど、レビ記にもありますが、細かな食物規定があったのです。ですからそのような面倒な食物規定を守らない人や、そのような規定のない異邦人と交わりをもって会食することは、避けられていたのです。使徒言行録には回心した後のペトロが出て来ますが、彼は幻を見ます。天からあらゆる獣、地を這う者、空の鳥が布でつるされて降りて来て、それを食べろと言うのです。それに対して、ペトロは、とんでもない自分は汚れたものは食べない、というのです。しかしこの後考え直してローマ人の敬虔な隊長コルネリウスと会食するのです。それに対してこのことを聞いたユダヤ人キリスト者は、なぜ割礼のない異邦人と会食をしたのかとペトロを責めるのです。つまりたとえキリストを信じ信仰に入っても、当時の慣わしや食物規定は、実に大きな影響力を持ち、生活を支配していたのです。ですからファリサイ派の律法学者たちが、イエス様が罪人たちとゆるい会食をしているのを見て、それを責めたこともあるのです。

イエス様はこの終わりに、ご自分は正しい人を招くのではなく罪人を招くのだ、ということを言われました。常識的に考えれば、正しい人や、善い人が招かれるべきであり、罪人や悪い人は招かれないというものでしょう。ところがイエス様は逆なのです。これについてイエス様は当時の言い回しを語っています。「医者が必要とするのは、丈夫な人でなく病人である。」今日では定期的な健康診断もありますが、このイエス様が言われたたとえはあたりまえのことでありましょう。しかし私たちのうちで、今までに医者にかかったことのない人はいるでしょうか。いるとしたらよほど奇抜な人です。或いはどこか悪いところがあっても気がつかずにいる人かもしれませんし、よほどな医者嫌いかもしれません。このイエス様の言葉では、丈夫な人が正しい人に対応しており、医者が必要としている病人が罪人であります。癒すお方を必要としない正しい人とは誰のことでしょうか。その前に正しい人とは誰がいるのでしょうか。パウロの言葉を借りるなら、彼は詩篇 14 編を引用して「正しい者はいない。一人もいない。」とローマの信徒に書き送っています。「丈夫な人」とは「強い人」とか「力のある人」というのが元の言葉ですが、そのような人でもどこかに弱さがあったり、するものです。正しい人といっても、全く正しい人というのはイエスさま以外にはおられないのです。そうしますと正しい人というのはいわば自分を正しいと確信している人であり、ここで言えばファリサイ派の律法学者たちのことなのです。彼らは自分の罪に気がつかず、自分は正しいと思っているので、癒すお方であるイエス様を必要としないのです。それに対して徴税人や罪人は自分の罪や弱さを自覚しているので、イエス様がお招きになり、悔い改めへと導かれ、癒されるのです。「招く」というのは「声をかけて呼ぶ」という言葉です。収税所に座っていた徴税人レビに「わたしに従いなさい。」という掛け声、招きの声であります。「私が来たのは」と主は言われますが、主イエス・キリストがこの世に来られたのは、罪人の救いのためです。ファリサイ派の律法学者たち、あなたがたは正しくて丈夫なのだから、医者であるわたしの癒し、救いは必要ないのだ、という皮肉でもあります。徴税人レビが、イエス様に「わたしに従いなさい」という声をかけられ救いに招かれました。「従う」とは「同行する」ということです。何か特別なことをするのではなく、ただついて行く、一緒に行くことなのです。しかしその一緒について行くだけのことが、何と意味深く、最後まで絶えずつき従うことが難しいことであるか。

イエス様と共に人生を歩むというのは、命の道を歩むということです。イエス様は最終的な目標点におられ、また、わたしどもが歩む道を共に歩んでくださる道そのものであります。イエス様のお招きに与り、洗礼を受けたものが、イエス様のみ後を一步一步踏みつつ歩む。この信仰の歩みがいかに幸いなことでありましょうか。イエス様は声をかけられます。招いてくださっています。そして待っておられるのです。「わたしに従いなさい。」と。